徳島大学教養部紀要
(人文・社会科学)
第十九巻 別刷
1984

ハルトマン・フォン・アウエの「エーレク」

石 川 栄 作

徳島大学教養部紀要
(人文・社会科学)
第十九巻 1984

ハルトマン・フォン・アウエの「エーレク」

石 川 栄 作

Erec Hartmanns von Aue

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Erec Hartmanns von Aue ist ein typischer Artusroman, wo das ritterliche Ideal vom Dichter entfaltet wird. Was ist denn das Ideal? Um dessen Grundstein zu finden, möchten wir hier Erecs innerlich aufwachsenden Weg verfolgen.

Erec gewinnt zuerst durch den Sperberwettstreit Enite zur Frau. Er büßt aber danach leicht seine *êre* ein, weil er, sich der Liebe zu Enite hingebend, auf die Pflichten des Ritters vergißt, *sich verliget* (2971). Erecs und Enites Liebe, die nicht verdient, sondern schnell gewährt war, muß sich nunmehr erproben.

Der Weg zur Läuterung ist die folgende Reise der beiden. Erec befiehlt Enite bei Todesstrafe, vorauszureiten und zu schweigen. Indem Enite aber das Schweigegebot bricht, verhilft sie ihm zum Sieg über gewaltige Gegner, seien sie Räuber, Riesen oder starke Ritter. Erec, aus Anlaß von ihrer *triuwe* innerlich heranwachsend, wird doch endlich im zweiten Kampf gegen Guivreiz besiegt. Was meint die Niederlage? Er sieht damit seine bisherige *tumpheit* und *groze unmâze* (7013–4) ein. Die *unmâze* des Ritters ist, wie Peter Wapnewski sagt, Verstoß gegen die schöne Ordnung der ritterlichen Idealwelt wie die ichbefangene Hingabe an die Liebe: wer nur liebt um des Liebesgenusses willen scheitert wie der, der nur um der Kampfeslust willen kämpft.

Dies erkennt Erec noch deutlicher im letzten Abenteuer *Joie de la curt*. Der Gegner Mabonagrin ist, was Erec war. Der Gegner ist nämlich in der Liebe der Geliebte gefesselt, obwohl die wahre Minne darin besteht, daß sie nicht sich in genießendem Besitz abschließt, sondern in der Welt bewährt und bestätigt. Er muß jetzt, wie Erec damals, aus dem verschlossenen Baumgarten ausreiten, um die Ritterschaft in der Welt zu bestätigen. Mabonagrin kann es nun gemäß dem Versprechen ausführen, als er besiegt wird. Erecs Sieg bedeutet also die Rettung des Ritters, aber auch die Auferstehung der höfischen Freude. *Des hoves vreude* wird noch dazu vermehrt, indem Erec danach mit christlichem Erbarmen dem Artushof die 80 schönen Witwen zu, deren Männer von Mabonagrin besiegt waren. Die *êre* des Ritters kann nur in der ritterlich helfenden Tat gedeihen, nur in der Verflechtung mit der Gesellschaft. Erst dann kann der Ritter sowohl *der werlt hulde* wie auch *gotes hulde* verdienen.

Gerade diese zwei Gnaden zu verdienen, war das höchste ideale Ziel Erecs. Erec ist nun *der Êren holde* (9963), der der Gesellschaft durch die Heldentat einen Dienst leistet. Er erkennt jetzt das Zusammenspiel vom Göttlichem und Menschlichem und ist nunmehr Gott gegenüber dankbar für die Ehre und Gnade. Hier können wir den Grundstein des Hartmannschen ritterlichen Ideals finden. *Erec* ist der erste Schritt zum ritterlichen Ideal, das der Dichter Hartmann später in seinem letzten Werk *Iwein* verwirklicht.

序

ハルトマン・フォン・アウエの四つの叙事詩の中で最初の作と考えられる「エーレク」は、典型

的なアルトゥース・ロマーンである。そこに展開された世界はアルトゥース王宮廷騎士社会であり、冒険・競技・饗宴は勿論のこと、衣裳や名馬そしてその鞍に関するきらびやかな描写等がその絢爛たる騎士世界の雰囲気を醸し出していると言えよう。こうした宮廷的騎士社会を背景に繰り広げられる円卓の騎士エーレクの冒険の物語は、しかし、このドイツの詩人ハルトマンによって初めて創り出されたものではない。当時の他のほとんどの叙事詩のように、このハルトマンの「エーレク」も他国の詩人による既成の物語をドイツ語で再構成したものなのである。その原典は一般にフランスのクレチアン・ド・トロワの「エレクとエニード」であるとされている[1]が、しかし、約7000詩行のクレチアンの作品に対して、ハルトマンの作品はオリジナルで約10350詩行にも敷衍されており[2]、またクレチアンには見られないエピソードも新たに織り込まれていることなどからも、これが単なる翻訳でないことは今更言うまでもないことである。そこにはハルトマン独自の理想的騎士世界が展開されているのは確かであり、特にハルトマンはエーレクの冒険をキリスト教的・倫理的なものへと深めていると言えるのではあるまいか。この作品のテーマはキリスト教的騎士としてのエーレクの内面的成長にあるのであり、苦難に満ちた数々の冒険を勇敢な騎士的行為で克服しながら主人公エーレクは内面的に成長して理想の騎士へと近づいてゆくのである。その成長過程で重要な役割を演じているのが、妻のエーニーテであり、彼女の堅固な誠実さがのちにエーレクの内面的浄化の契機ともなるのである。それでは一体ハルトマンの考えた理想の騎士とはいかなる騎士であったのだろうか。その理想像は「エーレク」のあと「グレゴーリウス」と「哀れなハインリヒ」を経て最後の作「イーヴァイン」において初めて確立されるものと私は考えたい。騎士の理想像を求めて、「エーレク」は詩人ハルトマンにとってまさにその模索の第一段階であり、いわば出発点であったのである。本稿ではエーレクの騎士としての成長に焦点を合わせて、それに必要不可欠のエーニーテの誠実さをも浮き彫りにしながら、エーレクの成長過程を辿ることによって、ハルトマンの目指す理想的騎士像の礎を探り出すことにしよう。

I. はいたか競技とエーレク ——êre と minne と verligen——

明らかに欠落していると見なされるハルトマンの「エレーク」の冒頭部分は、クレチアンの作品から容易に推測される[3]。カラディガーン城のアルトゥース王は復活祭に「白鹿」(den wîzen hirz, 1757)狩り——これを射た者には宮廷一の美女に接吻できるという名誉 (êre) が与えられる

1) この原典に関する問題はまだ十分な解決を見ておらず、さまざまな推測が立てられているが、主原典としてクレチアンの作品が関係していたことは疑いないであろう。「ハルトマン作品集」(郁文堂、1982年) の解説422頁参照。

2) 「エーレク」の伝承事情はきわめて悪く、ほぼ完全に伝承されているのは、いわゆる「アンブラス本」だけである。勿論これにも欠落部分が多いのであるが、他の断片によって満たされる57詩行を含めて、現在伝承されている全体の量は10192詩行であり、ペーター・ヴァプネフスキーによると、オリジナルの量は約10350詩行であったと推定されている。Vgl. Peter WAPNEWSKI: Hartmann von Aue. Sammlung Metzler Band 17, J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart 1962. S. 47. u. S. 50.

3) Hugo KUHN: 〉Erec〈 (1948), In: Wege der Forschung Band CCCLIX, Hartmann von Aue. Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1973. S. 18.

――を催して騎士たちとともに出かけてゆく。その王妃ギノヴェールも若き騎士エーレクと侍女たちを従えてそれについてゆく。その箇所でハルトマンのテクストは始まっている。そこで王妃ら一行が出遭ったのは、婦人と矮人を伴なった一人の見知らぬ騎士である。王妃はその騎士の名前を知りたいと思い、侍女一人とエーレクを遣わせて尋ねさせるが、侍女もエーレクも矮人から鞭で打たれてしまう。これは王妃の栄誉 (êre) のみならず、エーレクの騎士としての名誉 (êre) の侮辱 (leit, 111) である。êre (名誉) はドイツ中世文学においてはとりわけ重要な役割を演じている概念の一つであり、登場人物たちはこの êre を求めて行動するのであるが、まさにこの êre を侮辱されたことからエーレクの物語も展開してゆく。つまり、王妃の前で自分の身に加えられた屈辱 (unêre, 107; schande, 116) の報復を遂げて名誉を回復するため、さらに王妃の栄光 (êre, 134) のためにも、エーレクはその騎士の跡を追って旅立つこととなるのである。従って、フリードリヒ・マウラーが言うように、加えられた leit、つまり外側からの侮辱 (Entehrung, Beleidigung) が「エーレク」のあらすじを動かし始めると言ってもよいであろう[4]。エーレクの行動は恥辱 (leit, 167) に見舞われた者のそれである、と詩人ハルトマンによっても明白に語られている。

こうしてエーレクは、身の恥辱 (durch sîn leit, 220) を晴らすことのみを考えて騎士の跡を追ってトゥルメインと呼ばれる城へとやって来るが、そこの城主イーマーイーン公は二年前から「はいたか」(sparwære, 189) をめぐる宴 (hochzît, 184; 201) を催している。それは、自分の連れた婦人が第一の美女であることを騎士が決闘に勝つことによって証明したならば、その婦人が銀の竿の先端にとまっている はいたかを得ることができる (200–3) というものである。エーレクに恥辱を加えた例の騎士は、すでに二度も連れの婦人のためにはいたかを獲得し、三度目もわがものとばかり、揺るがぬ名誉 (êre, 209) を求めて、今またこの城にやって来たのであった。この騎士イーデールスとはいたか競技 (des sparwæres strît, 453) のことをエーレクがその日の宿泊所となった廃屋の翁から聞き知ると、エーレクは決闘の決意をして、勝利を収めた場合には翁の娘エーニーテを妻にする約束をする。従って、恥辱 (leit, 481; grôz laster, 488) の復讐 (gerechen, 491) のための決闘が、はいたか、すなわちエーニーテの美と愛を賭けた闘いとなったのである。しかし、ハルトマンは、翌朝行なわれたこの決闘の決着のつく場面を次のように語っている。

diz beleip lange stæte:	そのまま長く両者は譲らず、
wederm geviele der gewin,	いずれに勝金が入るのか、
des was zwîvel under in,	それはだれにもわからなかった。
unz daz Êrec der junge man	ところが、やがて若者エーレクは、
begunde denken dar an	敵の連れた矮人から
waz im ûf der heide	野原で受けた、
ze schanden und ze leide	あの恥辱と被害を

4) Friedrich MAURER: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Francke Verlag Bern und München 1951. S. 42.

von sînem getwerge geschach.	思い出し、
und als er dar zuo ane sach	また、美しいエーニーテ姫を
die schœnen vrouwen Ênîten,	見つめると、
daz half im vaste strîten: (927–37)	彼の力は倍になり、彼の剣風は鋭くなった。
…	…
sînen geiselstreich er rach. (950)	かくて彼は鞭打ちの仇をとったのである。

エーニーテの美がエーレクに力を与えたことも確かに否めないが、しかしここではあの鞭打ちの恥辱と被害 (ze schanden und ze leide, 933) の方が強調されていることは明白である。事実、決闘に勝ったのち、エーレクはまず自分が受けた恥辱 (leit) に対する罰を相手側に与えるのである。つまり、敗者イーデールスにはすぐさま王妃のところへ出かけて行って、加えた恥辱 (laster, 1025; grôz ungemach, 1026) をぬぐってさしあげるよう命令し、矮人には卓の上に腹ばいにさせておいて鞭打ちの罰を与えた (1064–75) のである。

しかし、この名誉 (êre) の回復と同時にエーレクはエーニーテのためにはいたかをも手に入れたということは、これからの「エーレク」の物語にとって大切なことである。勝利を収めたエーレクの賞賛 (1293–308) は当然のことながら、はいたかを得たエーニーテも喜びに溢れた女性 (1376–85) として語られており、さらにエーニーテの賞賛は、翌朝の旅立ちに際してイーマーイーン公の近親の乙女から一頭の良馬を贈られることによって象徴的に高められていると言えよう。ハルトマンによって長々とそのすばらしさが語られているこの良馬 (1423–53) で出かけるエーニーテは、幸せそのものの象徴なのである。そしてこの二人の初めての旅で二人の間にはミンネ (minne) が芽生えてくるのである。

alsô si dô beide	広い野に出た
kâmen ûf die heide,	二人の旅、
Êrec begunde schouwen	エーレクは
sîne juncvrouwen.	わが妻となる姫に見とれる。
ouch sach si vil dicke an	エーニーテ姫もはにかみながら、
bliuclîchen ir man.	たびたび夫を見つめている。
dô wehselten si vil dicke	繰り返し交わす
die vriuntlîchen blicke.	やさしいひとみ、
ir herze wart der minne vol:	二人の心はミンネ（愛）に満ち、
si gevielen beide ein ander wol	互いがますます、いよよますます、
und ie baz unde baz.	気に入った。
dâ envant nît noch haz	よこしまな思いも憎しみも、
ze blîbenne dehein vaz:	そこにはとどまる家がなく、
triuwe und stæte si besaz. (1484–97)	誠実と不変の愛がその場をしかと占めたのである。

二人の愛は、このあとエーニーテの姿が美しく描かれることによってますます高められる。アルトゥース王の宮廷に到着したエーニーテは最高に美しい乙女 (1607–10) であると語られ、今や

エーニーテがこの宮廷で最高の美女、否、世界で最高の美女たることに誰も異論をはさまず(1763–5)、先に行なわれた白鹿狩りで権利を得ていたアルトゥース王がエーニーテに口づけしたのも当然のことである。はいたか競技のみならずこの白鹿狩りでもその美が認められて二重の栄誉に輝いたエーニーテは、さらにのちには天使 (engel, 1843) にも喩えられ、その美しさと高貴さにエーレクの胸がかき乱されたのも無理からぬことであった。そこで二人を支配していたのはミンネだった (1858–60) のである。

こうしてエーレクとエーニーテの二人は聖霊降臨祭の日に結婚式をとり行ない、イングランド・カントワルイェの司教の手で結びつけられた。この饗宴の栄華は、多くの客人の列挙に始まって、騎馬槍試合 (turnei) の描写によって宮廷的に飾られているが、この試合の長い描写(2222–2807) の中で特徴的なのは、エーレクが理想の騎士にまで高められているということである。彼は試合で最高の武者ぶりを発揮したばかりか、敬虔な気持ちをも持ち合わせた騎士として描かれており、ついには騎士の理想とされるガーヴェイン (2720–51) よりも高く評価され、有能の騎士 (der tugenthafte man, 2810) として世の賞賛 (loben, 2825) を得たのである。

こうしてエーニーテはその美で、エーレクはその武者ぶりでそれぞれに最高の賞賛を得たのち、アルトゥース王のもとを去って故国カルナントに帰ると、父より国の支配を委ねられ、ついにはエーレクは王、エーニーテは王妃の座につくことができたのである。

しかし、二人が到達したかに見えたこの最高の栄誉 (êre) は長続きしなかった。カルナントに帰国してからは、エーレクは思いのことごとくをエーニーテ夫人へのミンネに注ぎ (2928–30)、いかにすれば万事を快適にできようかと、そのことにのみ心を傾けている (2931–3)。彼の生きざまは変わった (2934) のである。

Êrec wente sînen lîp	妻にかまけて、エーレクの身は
grôzes gemaches durch sîn wîp.	いと安楽なものに慣れ傾いた。
die minnete er sô sêre	妻への愛はゆゆしくて、
daz er aller êre	ただ妻ゆえに騎士たるものの名声は、
durch si einen verphlac,	つゆかえりみられることもなく、
unz daz er sich sô gar verlac	彼はついには騎士の本務を忘れてしまい、
daz niemen dehein ahte	何びとももはや彼には
ûf in gehaben mahte. (2966–73)	敬意を抱くことはできなくなった。

彼の怠惰は宮廷全体に影響を及ぼし、宮廷はあらゆる歓びを失い、恥を晒していた (2988–90) のである。

この悪評がエーニーテの耳にも達したとき、彼女は憂いを胸に抱いて耐えていたが、夫が眠っていると思った寝室で、深い溜め息をついて思わずその憂いを口の端に洩らしてしまう。ところが、エーレクはそれをはっきりと聞き取り、彼女の憂い (sorgen, 3036) について詰問する。エーニーテの打ち明けによってエーレク自身の耳にも人々の悪評が入ってきて、エーレクはいともた

やすく êre を失ってしまったのである。しかし、この êre は、あの矮人による鞭打ちのときとは全く異なって外側から奪われるものではない[5]。名誉の喪失は今や加えられた leit ではなく、名誉はエーレクの倫理的怠惰、「騎士としての本務を忘れた」(sich verligen, 2971) こと、つまりはエーレクの落度によって失なわれてゆくのである[6]。これも leit の一つの形態ではあるが、これは例えば「ニーベルンゲンの歌」では役割を演じていないものであり[7]、ここに「エーレク」独特の問題が生じてくるのである。

二人は一体なぜ、そのあとすぐさま旅に出かけなければならないのであろうか。しかもエーニーテは夫の前を進み (3097)、何を聞こうと何を見ようと、口をきくことを禁じられたままで (3098–102)、旅を続けなければならないのである。エーニーテが憂いを口にしたということは彼女の罪だったのであろうか。エーニーテの独り言で二人の愛に破綻が生じたことから、エーレクはただちに妻の愛を疑ったのであろうか。これらのことについては詩人ハルトマンは何も明らかには語っておらず、この場面の問題はなお詳しい考察を必要とするところであるが、ただここで詩人ののちの叙述からはっきり言えることは、その二人の旅は妻エーニーテの誠実の試しであった (6781–2) ということである。しかしこの記述を頼りに、その冒険の旅を妻の誠実の試しとだけ解するならば、それは一面的にしか把握していないこととなろう。全ての原因がエーレクの「騎士としての本務を怠った」(sich verligen, 2971) ことにあるということは明らかであり、試されるべきはむしろエーレクの方である。エーレクはこれまでの安楽 (gemach, 2967) に対する償いとして苦難 (arbeit, ungemach) の旅を試みなければならないのである。従って、妻が夫の前を進み、口をきいてもならないということは、妻エーニーテに課せられた試練であるばかりではなく、夫エーレクにも課せられた試練であると言えるのではあるまいか。妻の打ち明けでしか自分の怠惰に気づくことのできなかったエーレクは、夫と妻とが互いに隔てられた苦難の冒険の旅において、ミンネと騎士道の調和を保つ理想の騎士へと成長しなければならない。これがその冒険の旅でエーレクに課せられた課題なのである。では、その苦難に満ちた数々の冒険をエーレクはいかにして克服することができ、いかにして理想の騎士への道を辿っていったのか、それを以下において検討してゆくことにしよう。

II. エーレクの冒険と「誠実」の夫人エーニーテ ——arbeit と triuwe と versuochen——

第一日目の冒険

旅に出てまず第一夜、エーレクとエーニーテは森の中で三人の盗賊が待ち構えるところにやって来る。盗賊のいることにまず気づいたのは、先を行くエーニーテである。これが彼女を襲ってきた最初の心痛 (herzeleit, 3125) である。旅の途上何を見ても口をきいてはならない——口をき

5) Ebd., S. 44.
6) Ebd.
7) Ebd.

けば命はない——と命令されてはいるものの、警告しないと夫は盗賊たちの不意討ちに遭ってしまう。夫に向ける愛慕の情が誠実な (triuwe, 3143) ものであればこその心痛 (leit, 3144) であることは詩人ハルトマンも語っている。二者択一に迷った (3158–68) のち、エーニーテは次のような決断を下す。

'bezzer ist verlorn mîn lîp,	「あのように立派な殿と比べて、
ein als unklagebære wîp,	惜しまれもせぬ女の私の、
dan ein alsô vorder man,	こんな命のなくなる方がいいのだわ。
wan dâ verlür maneger an.	殿が亡くなれば、それは多くの人にとって損失だ。
erst edel unde rîche:	あの方は高貴で栄光の身。
wir wegen ungelîche.	私などとても釣り合わない。
vür in wil ich sterben	あの方の破滅を見る前に、
ê ich in sihe verderben,	私があの方のために死にましょう。
ez ergê mir swie got welle.	この身は神の意のままに。
ez ensol mîn geselle	背の君のあの方を
daz leben sô niht enden	ここで死なせてなるものか。
unz ich ez mac erwenden.' (3168–79)	私の力で防げる限り。」

この妻の決断と警告でエーレクは盗賊からの不意討ちを免れ、敵をいともたやすく倒すことができたのであるが、この夫の命令に反する妻の警告は、例えばペーター・ヴァプネフスキーも述べているように、決してエーニーテの自制と従順さの欠陥を非難するものではなく、エーニーテ夫人が命令や法を越えて夫を愛しているということを示しているのである[8]。エーニーテ自身も、誠をこめた愛ゆえに (durch triuwe, 3184; durch mîne triuwe, 3262) 敢えて警告したことを二度もはっきりと夫に示している。にもかかわらず、その罰としてエーニーテには馬丁の役が与えられ、彼女は三頭の馬の面倒を見なければならない。これもまたエーニーテにとって苦難 (arbeit) の一形態であるが、そのときの反応をハルトマンは次のように語っている。

'herre mîn, daz sol wesen'	「わが殿よ、そのように致します」と、
sprach diu vil guote,	いと高貴なる婦人は答えた。
wan ez si niht enmuote.	このことを彼女は悲しんではいなかった。
vil wîplîchen si dô leit	まことに女性らしいやり方で、
dise ungelernet arbeit	彼女は慣れないこの苦役に、
und dar zuo swaz ir geschach	そしてまた、彼女の心を苦しませる、
an ir herzen ungemach. (3277–83)	あらゆることに耐えたのである。

二人が初めて馬を進めた先の幸せな旅とは対照的に、今回の旅は苦難 (arbeit, ungemach) に満ちたものであるにもかかわらず、エーニーテは全てのことを耐え忍ぶ。エーニーテの誠実さが明らかに窺えよう。

このエーニーテの誠実さは、二度同じことが繰り返されることによってさらに強められる。す

8) P. Wapnewski: a. a. O., S. 55.

なわち、二人が三マイルも行かぬうちに、今度は盗賊五人が待ち伏せているのである。それに気づいたのも勿論前を行くエーニーテである。再度苦悩（3352–77）に陥るが、先程と同じく誠実の心から（durch triuwe, 3415）自分の身がどんな苦境におちようとも、勇を奮って警告しなければならない（3375–7）という決断を下す。そのためにエーレクは再度命拾いをするが、命令違反の罰としてエーニーテはさらに五頭加えて全部で八頭の馬の面倒を見なければならない。そのときのエーニーテの反応をハルトマンはこう語っている。

swie verre ez wider vrouwen site	しかし、およそ高貴な婦人の慣わしと務めには、
und wider ir reht wære,	いかに反した仕事とはいえ、
si leit ez âne swære	彼女は心おだやかに、
mit senftem gemüete:	難儀ともせずに耐えていた。
daz lêrte si ir güete.	これぞ彼女の床しさである。
diu vrouwe grôzen kumber leit,	深い悲しみを感じてはいたが、
wan daz si ze liebe ir leit	その謙虚さの教えるままに、
in ir herzen verkêrte,	悲しみを心の中で
als si ir diemuot lêrte. (3445–53)	喜びと化していたのである。

さらに増してゆく難儀にもエーニーテは屈することなく、夫エーレクへの誠実を示すところに喜びを見い出してゆく。この苦難（arbeit, ungemach）の旅の中にエーニーテの誠実さ（triuwe）がありありと読み取られうるというところにこの一連の冒険の特徴があると言えよう。

第二日目の冒険

二人の旅はこのように苦難（arbeit, ungemach）の旅だと特徴づけられる。彼らの求めるものは安楽（gemach）ではなく難儀（arbeit, ungemach）だったのである。一晩中歩き続けた翌朝、森から抜け出たところで出遭った一人の小姓が二人の姿を見て心を動かした（3514）のも、その arbeit（3514；3528；3533；3586）と ungemach（3511）の姿からである。そのため小姓は二人に肉とパンと葡萄酒を与えたが、その恵みものに対するお礼としてエーレクが小姓に馬を一頭だけしか与えなかったのも、実はエーニーテを馬丁の役で苦しめるためだったのである。彼らが安楽（gemach）を求めていないということは、その小姓が仕える伯（ガロエイン）[9] からその城に逗留するようにと出迎えられた際にも明らかである。その出迎えを辞退して、彼らは旅宿に宿泊するのである。しかもその旅宿では、エーレクはエーニーテに一緒に食べることも一緒に寝床に就くことも許さなかった。これも ungemach（難儀）の一形態であり、彼らには gemach（安楽）が許されていなかったことが明らかである。

一方、逗留を拒まれた伯はこの旅人たちとは正反対のものを求める誘惑的な人物として描写されている。エーニーテの美しさに心を奪われて、旅宿へ赴いてエーニーテを口説く言葉は、華や

9) クレチアンの作品ではこの伯にガロエインという名前がつけられているが、ハルトマンでは名前なしである。

かな生活への誘惑ばかりである。しかし、誠実なエーニーテはその誘惑に負けはしない。それどころか女性に具わった見事な知恵 (list, 3842; 3907; 3940) で、伯に真夜中の攻撃を勧めると同時に偽りの約束をすることによって、エーニーテは自分の名誉と夫の命 (ir êre und ir mannes lîp, 3942) を守ろうと努めるのである。エーニーテ夫人は誠実な女性 (ein getriuwez wîp, 3943) であったと詩人ハルトマンによっても語られている。この誠実さは、エーニーテがエーレクに警告すべきか否かと迷う悩みの中に最も明白に読み取られよう。

nû gedâhte diu guote	高貴な女性は
alsô in ir muote:	考え悩む。
'ez ist mir ûf daz zil komen	「もうどうにも道はないのだわ。
daz mir benamen wirt benomen	私が警告をせぬ限り、
der aller liebiste man	殿は私からきっと奪い取られてしまう。
den ie wîp mêr gewan,	今までに女性が得た、どの殿方と比べても、
ez ensî daz ich in warne.	より好ましいこの殿御。
ouch weiz ich daz ichz arne,	しかしまた、私が重ねて命令に背けば、
zebriche ich aber sîn gebot.	罰を受けるのは必定のこと。
nû rât mir, herre, rîcher got!	ああ、お助け下さい、主よ、み力強き神様。
des enwart mir nie sô nôt.	あなた様のお助けを今こそ伏してお願いします。
ich weiz wol, ez ist mîn tôt,	殿に言葉をかけるなら、それはたちまち私の死だ。
wan er hât mirz nû zwir vertragen.	もう二度も免じてもらったあとですもの。
waz aber von diu, wirde ich erslagen	しかし、この私が打ち倒されて、夫に命をとられても、
unde nimt er mir den lîp?	それがいったいなんだというの。
dannoch lebet manec vrum wîp.	なおも多くの優れた女らがいるではないか。
ich enbin ouch niht sô klagelîch:	さして惜しまれもせぬこの身にひきかえ、
sô ist er edel unde rîch,	高貴で栄花の
mîn lieber herre.	わが背の君。
ê im iht gewerre,	あの方に禍事の起こるより、
sô wil ich kiesen den tôt.' (3972–92)	私がむしろ死を選びます。」

こうしてエーニーテは、誠実 (triuwe, 3993) の命ずるままに、夫の寝床に近づいて夫の前に跪いて一部始終を語ったのである。そのためエーレクは伯の真夜中の攻撃を退けたわけであるが、伯をだまし欺いたエーニーテの行為を詩人は罪なきもの (âne sünde, 4027) と語っている。しかし、エーニーテは逃げる途中再び夫から叱責を受ける。二度と繰り返さぬことを誓うや否や、またエーニーテはその誓いを破ることとなる。つまり、彼女は伯が大勢の助太刀を伴なって追いかけてきたことにすぐさま気がついたのである[10]。このときも、詩人が語っているように、誠実の結ぶ絆 (der Triuwen bant, 4145) が求めるままに、彼女はすぐに誓いを破ったのであり、そのためにエーレクは不意討ちに遭わずに、伯を打ち倒すことができたのである。にもかかわらずエーレク

10) 気づくことにおいて夫人の方がいつも早いのは、夫人は無防備であるのに対して、夫は武装しているからである。このことをハルトマン自身が説明して明らかにしている (4150–65)。

はエーニーテのかくも度重なる違背を咎めたが、その叱責は今までよりも増して激しかった。エーニーテは繰り返さぬことを改めて誓ったものの、やはりそれをまた次の冒険で守らぬこととなるのである。

第三日目の冒険

これまでの苦難は、しかし、これから起こる危険と苦難 (nôt und ungemach, 4273) に比べれば取るに足りないもの (arbeit, 4269) である。道を進んでゆくうち、次に攻撃をしかけようとしていた敵は、今までのような盗賊 (roubære) でも、また伯 (grâve) でもなく、アイルランドの小男にして勇敢なる国王 (künec) ギフレイスであったからである。冒険は回を重ねるごとにますます危険なものとなってくるというわけである。この勇敢なる男の接近を夫に知らせるべきか否かのエーニーテの悩みの部分は、残念ながら欠落しているが、エーニーテの誠実 (triuwe, 4319) が改めて証明されたことは、詩人ハルトマンがそのあとに語っている。彼方から激しく接近してきたギフレイス王は、エーレクの難儀 (arbeit, 4363; 4367) を知りながらも決闘を申し込む。もはや闘うほかすべなしと認めたエーレクは、勇猛の武者ギフレイスと力を競うが、相手の一撃がエーレクの脇腹を襲い、エーレクは傷を受けてしまう。しかし、エーニーテの言葉 (4426–8) に勇気づけられて——これもエーニーテの誠実さと受けとれよう——エーレクは、相手にも痛手を加えて自分の前に倒してしまう。しかし、今までの冒険と違ってここで重要なのは、ギフレイス王を殺してしまうのではなく、反対に一人の友人を得ることになったということである。つまり、闘いを終えたエーレクとギフレイス王との間には友情が生まれてきたのである。二人はこもごも相手の受けた傷を嘆いた。二人はそれぞれの軍衣を引き裂いて相手の傷口の包帯とした。誠に友情溢れる行為である (4491) とハルトマンも語っている。闘いに負けたギフレイス王は休息のため彼の城に滞在するようエーレクに請うが、それを受け入れたもののエーレクは次のように語っている。

'ich enmac niht langer hie bestân	「拙者がここにとどまれるのは、
niuwan unze morgen vruo	明朝までのことである。
und sage iu war umbe ich daz tuo.	その訳を申そう。
ich envar nâch gemache niht:	拙者がこの旅に求めているのは、安楽ではない。
swaz ouch mir des geschiht,	今いかなる安楽が与えられても、
dar ûf enahte ich niht vil,	拙者はそれにさして心を傾けぬ。
wan ich dar nâch niht werben wil.'	左様なものを探しているのではないから。」

(4573–9)

エーレクが安楽 (gemache, 4576) を求めていないことはいまなお明白であり、事実エーレクとエーニーテの二人は翌朝ギフレイスの城をあとにしたのである。

第四日目の冒険

こうして苦難の旅を続けているうち、二人は、アルトゥース王が遊猟のために野営の陣を張っていた森へとやって来る。二人がそこで出遭ったのはアルトゥース王の内膳頭ケイイーンである。エーレクの血まみれの苦難の旅を認めた邪知のケイイーンはよからぬもくろみを企てて、エーレクを捕えて自分の手柄にしようと考える。しかし、このような臆病者がエーレクに勝つ筈がない。闘う前に逃げ出したケイイーンは、それを追うエーレクの騎士のたしなみに救われて、命だけは助かるものの、宮廷仲間のところへ帰って彼の恥辱の有様 (sîn schemelîchez mære, 4840) を話さなければならない。すると、このケイイーンの話に出てきた騎士は誰であろうかと推測しているうちに、あれはラク王の子息エーレクに違いないと皆は異口同音に推測したので、アルトゥース王はガーヴェインとケイイーンにエーレクを野営に連れてくるようにと頼む。しかし、追って来たガーヴェインに会ったエーレクは、今はあらゆる安楽 (gemaches, 4978) を身から断たねばならぬことを述べて、それを辞退する。安楽 (gemach) を求めぬエーレクの堅い意志を見抜いたとき、ガーヴェインは、王が先回りするまで、話に花を咲かせて時を費すことによって、エーレクをアルトゥース王に謁見させたのである。そのときのガーヴェインの策 (mit listen, 4998; 5010; 5028) に対してエーレクは次のように語っている。

'daz ich dâ her bin komen,	「ここに到達したのは、
des was mir vil ungedâht.	拙者の求めたことではない。
ir habet mich übele her brâht.	拙者をここへ連れるとは、貴殿、よろしくござらぬぞ。
swer hin ze hove kumt	今の拙者がその例だが、
daz ez im sô lützel vrumt	名折れになるようなさまをして
als ez mir nû hie tuot,	宮廷に出るくらいなら、
dem wære dâ heime alsô guot.	家にとどまるのがよいのである。
swer ze hove wesen sol,	宮廷に姿を見せる者には、
dem gezimet vreude wol	快活の立ち居と、
und daz er im sîn reht tuo:	身を辱しめぬ振る舞いこそふさわしいが、
dâ enkan ich nû niht zuo	拙者は今それを為しえず、
und muoz mich sûmen dar an	体の動きもままならねば、
als ein unvarnder man.	宮廷びととの交わりは思い切るべきものである。
ir sehet wol deich ze dirre stunt	拙者が今は疲れ傷つき、
bin müede unde wunt	宮廷の雅(みやび)にふさわぬことを、
und sô unhovebære	貴殿はご覧になられように。
daz ich wol hoves enbære,	貴殿が許して下さったら、
hetet ir es mich erlân.	宮廷びとの居並ぶこの場を拙者はむしろ避けたのに。
ir enhabet niht wol an mir getân.'	貴殿は拙者をひどい目に遭わせるものだ。」
(5049-67)	

この言葉からもエーレクが安楽 (gemach) を求めていないことは明らかである。事実、エーレク

はアルトゥース王のもとに一時とどまり、丁重なるもてなしや王妃の膏薬（phlaster, 5148）でもって傷ついた身体を疲労から休めはしたものの、それ以上の饗応は受けず、王と王妃の頼みさえも辞退して、翌朝にはただちに旅立つことになるのである。

一連の冒険とは趣を異にするこのアルトゥース王の野営における一時休息は、一体何を意味するのであろうか。この一時滞在の挿入で明らかなことは、騎士たる者の窮極的な目的地はアルトゥース王宮廷であるということである。そこには騎士としての最高の栄誉が待ち受けているのである。エーレクもその栄誉を目指していることは言うまでもないことである。それにもかかわらず、ここでエーレクがアルトゥース王のもとに長くとどまらなかったということは、彼の身体に受けた傷のみならず騎士としての傷もまだ完治せぬことの象徴であると解することができるのではないだろうか。アルトゥース王並びに王妃ギノヴェールはなるほどエーレクのその「傷」を和らげることはできたが、しかし、完全に治すことはできなかった。エーレクはまだなお冒険の旅を続けなければならないのである。しかし、エーレクの旅には少しも進展がなかったというのでは決してない。エーレクは今や、宮廷に姿を見せる者には身を辱しめぬ振る舞いの必要なこと(5056–8) を悟っているのであり、事実、この一時休息を契機にこれからの冒険でもって徐々にエーレクの内面的浄化の過程が明らかになってくると言ってもよいのである。

第五日目の冒険

エーレクが旅に出て第五日目に経験する冒険は、これまでの第一日目から第三日目までの冒険を一日のうちに繰り返すという意味を持っている。それゆえ冒険も以前のものよりは一層危険なものとなってくるが、しかし、それだけに浄化の過程も大きく進展すると言えるのである。

その内面的浄化の過程がはっきりと認められるのは、その日のまず第一の冒険、二人の巨人との闘いである。なぜなら、この冒険はこれまでの決闘とは異なって、自分のためではなく、困窮した他人のために行なう決闘だからである。つまり、エーレクとエーニーテが旅を続けているうち、窮地におちいった女性が助けを求める憐れな声を聞く。先日の小姓の親切な行為から慈悲深さの貴さを教えられていたエーレクは、事情を聞くとその場にエーニーテを残しておいて二人の巨人を追って闘い、憐れな女性の夫カドクを助け出すのである。暴力をふるうこの二人の巨人は以前の第一日目の冒険における粗暴な盗賊たちに対応するが、今回のエーレクの冒険は、困窮している者あるいは弱き者を支援し助け出すという模範的な騎士として決闘に臨むのであり、今までのような自己本位の行動ではなく、活動的にいわば「社会」へ参加し始めたと言えるのである[11]。エーレクの内面的成長は、その二人の巨人にいためつけられた騎士カドクを慰める言葉の中にも感じ取られよう。

'herre, enmissehabet iuch niht	「殿よ、巨人たちから
umbe dise geschiht,	かかる辱しめを受けたことを、

11) Vgl. P. Wapnewski: a. a. O., S. 56.

daz iu die risen hânt getân.	悲しまれてはなりませぬ。
jâ enwirt es nieman erlân	丈夫振りを求めるならば、
swer sô manheit üeben wil,	時として恥をなめねばならぬ、
in enbringe geschiht ûf daz zil	これはだれしも
daz er sich schamen lîhte muoz:	免れぬところ。
dar nâch wirt im es buoz.	のちには恥も消えるのです。
wie dicke ich wirs gehandelt bin!'	もっと悪い目に拙者はなんとしばしば遭わされたことか。」
(5666–74)	

しかし、エーレクの内面的成長に決定的な進展を与えたのは、その後のエーレクの気絶である。すなわち、カドクを解放し、再びエーニーテのいる場所へ戻って来たとき、疲労困憊のため再び傷口が開いて妻の前で意識を失ってしまったのであるが、このエーレクの気絶はまずエーニーテの誠実の堅固なる表現のいわば締めくくりとして役立っている。仮死状態——エーニーテは夫が死んだものと思っていた——のエーレクを前にして悲嘆に暮れるエーニーテの嘆きの中には、夫への誠実な愛が最もよく感じとられる (vgl. 6225–7) のである。その誠実さは自らも命を絶とうとして夫の剣で自らの身を刺そうとするエーニーテの行為の中にも見い出されよう。しかし、剣の先を胸に当てた刹那、それを中断させたのは、そこにちょうど馬を駆って現われたリーモルス城のオリングレス伯である。エーニーテの美しさに魅せられたオリングレス伯は彼女を妻にしようと企らむ。このオリングレス伯の誘惑は第二日目の伯（ガロエイン）の誘惑に対応するのであるが、しかし、華やかな妃としての将来を約束する今回の伯の誘惑にも、彼女エーニーテは決して惑わされず、夫への堅固な誠実を見せる。担架で運ばれるエーレクとともにひとまずリーモルス城へ連れて来られたエーニーテは、夫のそばを離れようとせず、力ずくでその夜の宴の席に連れ出されても栄華への誘惑にも負けずに、伯の妻になることを拒絶する。これに怒りを覚えたオリングレス伯の誘惑は以前の伯の誘惑よりも粗暴なものとなってゆくが、その伯の暴力に対しても、夫人は打たれて喜ぶ（6552–3）ことになる。夫が死んだと思っている今は、生きていることよりも死ぬことを彼女は千倍も強く望んでいた（6558–9）からである。

この伯の暴力に対するエーニーテの誠実な叫び声によって、エーレクは目覚める。この目覚めは、エーレクが妻エーニーテを守りたいからなのである[12] と考えることができよう。正気を取り戻したエーレクは、怒って人々の中へ飛び出し、最初の一撃でオリングレス伯とそのそばにいた二人の男を打ち倒したのである。他の者は逃げ去ったが、それも当然であろう。死神が恐かったからである。ただそこにとどまる勇気のあったのは、エーニーテ夫人ただ一人で、彼女はそれどころか大喜びである。禍は一転して幸福となり、ここに歓喜が訪れた（6685–7）のである。こうしてエーレクは妻の誠実さで生き返り、エーニーテは夫の助けで救出されたのであり、双方ともに死に直面してようやく夫婦の協力が絶対的に必要なものとして基礎づけられていると言えよう。二人の調和的な結びつきが今やここに現われたのである。エーニーテの道案内——ここに

12) Ebd.

すでに二人の協力が見られよう――で、先刻エーレクが気絶した場所に戻って、そこで和解をしたのも当を得たあらすじである。今やエーニーテが夫に伯の誘惑の一部始終を涙ながらに打ち明けたとき、夫が妻に課していたあの不思議な芝居が一瞬にして終わりを告げた。夫は妻を連れてカルナント城を出て以来、彼女とは一切口をきかなかったが、それが今こそ終わったのである。エーニーテの誠実さが今や夫にしかと確かめられたからである。その場面をハルトマンは次のように語っている。

durch daz diu spæhe wart genomen,	あのように態度を偽り、
des ist er an ein ende komen	探索しようとしたものを、
und westez rehte âne wân.	彼は今や明らかに疑いの余地もなく確かめた。
ez was durch versuochen getân	彼女が彼の正しき妻であるかどうか、
ob si im wære ein rehtez wîp.	全てはそれを知るためになされたことであったのだ。
nû hâte er ir lîp	黄金を溶鉱炉で
ersichert genzlîchen wol,	純化するように、
als man daz golt sol	彼は彼女の人柄を
liutern in der esse,	完全に試しおえたのである。
daz er nû rehte wesse	今や彼にはしかとわかった。
daz er an ir hæte	彼女が彼に
triuwe unde stæte	貞節と誠実を捧げており、
unde daz si wære	心揺がぬ
ein wîp unwandelbære. (6778–91)	妻なることが。

今までの苦難の旅はエーニーテの誠実さを確かめるための試し (versuochen, 6781) の旅であったことがここで明らかである。しかし、この記述から一連の冒険を単にエーニーテの誠実の試しとだけ解してはならないことは、すでに述べた通りである。夫と妻とが互いに隔てられた状態で続けられる苦難の旅は、エーレクにとってこれまでの安楽、つまりミンネに溺れ騎士としての本務を怠ったこれまでの彼の安楽に対する償いの旅であり、そのミンネと騎士道の調和を求めての試練の旅であったのである。そこでエーレクが数々の冒険を通して知り得たことは、妻の警告なしにはエーレクの騎士としての生命は維持されえなかったということである。このことをエーレクはエーニーテの誠実さを確かめることで悟ることができたと言えるのであり、このことは彼が騎士としても内面的に成長したことをも意味しているのである。黄金を溶鉱炉で純化するようにエーニーテを完全に試しおえることによって、エーレクもまた純化されることとなったのである。従って、エーニーテの誠実な叫びによるエーレクの先程の目覚めは、例えばペーター・ヴァプネフスキーも述べているように、エーレクが新たに生まれ、別の生になった[13]ことを意味していると言うことができよう。

この蘇生に結びつけられたエーレクの内面的な成長は、さらに次のギフレイス王との二度目の

13) Ebd.

決闘でより一層はっきりとなるのである。つまり、リーモルス城を逃げて出た一人の小姓からこの奇しきことを聞いたギフレイス王は、友のエーレクが危険にさらされていると思ってリーモルス城へと向かうわけであるが、その途中でエーレクとギフレイス王とは相手を知らずして闘う羽目となる。この冒険は無論第三日目のギフレイス王との闘いに対応するのであるが、しかしエーレクはこのたびの決闘では疲労のためにギフレイス王に敗れてしまう。一連の冒険においてことごとく勝利を収めてきたエーレクのこのたびのこの敗北は一体何を意味するのだろうか。殊にエーレクが生まれ変わった段階での敗北だけに重要であるが、以前の決闘と今回の決闘を比較してみて明らかになることは、この二つの決闘においてエーレクとギフレイス王の役割が取り替えられているということである[14]。すなわち、以前自惚れ強く戦闘意欲に満ちていたギフレイス王は、そのために敗北を喫したが、ここでは友を助けにゆく途上で道を開けるためにという道徳的な動機から闘うのであり、そのために勝利を得るのである。一方エーレクは、以前の闘いでは平和的に和解を試みており、そのために勝利を得たが、ここでは疲労しているにもかかわらず単なる戦闘意欲から勝利のみを欲しているので、決闘には敗れてしまうのである。従って、このたびのエーレクの敗北は、エーレクのこれまでの苦難 (ungemach) に満ちた冒険の旅においてもまだなお unmâze（慎みのない思い上がり）があったということを実際に示している[15] と言うことができるのである。エーニーテの叫びで、エーレクとギフレイス王の双方が誰であるのかを知り合ったのち、エーレクはそのことを友人ギフレイス王に向かって次のように明らかにしているのである。

'ir enhabet an mir niht missetân.	「貴殿が拙者に為されたことは、決して悪しき行為
swelh man tœrlîche tuot,	ではない。愚行が罰を受けるのは、
wirts im gelônet, daz ist guot.	世のことわりと申すもの。
sît daz ich tumber man	愚かなる拙者は、
ie von tumpheit muot gewan	その愚のゆえに、
sô grôzer unmâze	慎みを忘れた望みに駆られ、
daz ich vremder strâze	異国の大道を
eine wolde walten	ひとりわが物として、
unde vor behalten	多くの騎士を
sô manegem guoten knehte,	打ち退けんと欲したが、
dô tâtet ir mir rehte.	貴殿は拙者に当然の報いをくだされた。
mîn buoze wart ze kleine,	貴殿たち皆の栄誉を
dô ich alters eine	わが身ひとつに収めんとした拙者の払う償いは、
iuwer aller êre wolde hân:	まだ軽すぎると申すもの。
ich solde baz ze buoze stân.' (7009–23)	より重い罰を受けても当然のこの身でござる。」

14) Vgl. ebd., S. 57.
15) Vgl. ebd.

このエーレクの内面的成長を示す言葉はクレチアンの作品には見られないので、この箇所はそれだけに重要であるが、要するにエーレクはここで突然自分の愚かさ (tumpheit, 7013) と慎みのない思い上がり (grôze unmâze, 7014) を悟ったのであり[16]、その tumpheit と unmâze の償い (buoze, 7020; 7023) として敗北も当然のことだと理解しているのである。冒険を行なう騎士の高慢な思い上がりは、ペーター・ヴァプネフスキーが述べているように、騎士的理想の美しい秩序への違反であり、これは愛への自己本位な献身と同じことである[17]。愛の享受ゆえにただ愛するだけの人が恥辱を被るように、戦闘意欲のためにのみ戦う人は敗北を喫してしまう[18]ことをエーレクは悟ったのである。

こうして愛する夫としてもまた騎士としても内面的に成長したのちようやく、エーレクは妻のエーニーテと食事を共にし寝床も共にすることができると同時に、彼の身体の完全な回復も可能となるのである。つまり、その夜は木の下に臥所を作って妻とともに休息をとったあと、翌朝ギフレイス王のペネフレク城へ行くと、その王の二人の妹とエーニーテの看護でエーレクの身体の傷は見事に治ったのである。その際ギフレイス王の二人の妹が用いた膏薬が、アルトゥース王の妃ギノヴェールから贈ってもらっていたあの膏薬 (phlaster, 7225; vgl. 5148) であったことは決して意味のないことではない。ここに至ってエーレクはその膏薬で愚行の明白な象徴としての傷も完治することとなったと言えるのである。

このエーレクの「傷」の回復に大きく貢献したのは、今まで述べてきたように、勿論のことエーニーテの堅固なる誠実である。このエーニーテの誠実さは、ギフレイス王の二人の妹からすばらしい馬を贈られることによって象徴的に称えられていると言えよう。この馬の贈与は以前のはいたか競技におけるイーマーイーン公の近親の乙女からの馬の贈与に対応するが、ここではハルトマンによって馬の賞賛が約 500 詩行にもわたって綿密に語られており、それだけに今や「理想」の創った、完璧の子 (des Wunsches kint, 8935) と称えられるエーニーテの賞賛も頂点をなしているのである。

こうして物語も終わりに近づいたかのように感ぜられるが、しかしエーレクの冒険の旅はこれで終わったわけではなかった。エーレクが内面的成長を遂げただけではまだ真の栄誉 (êre) は得られないのである。栄誉 (êre) を求めてエーレクは十四日後また妻のエーニーテと友人のギフレイス王を伴なって旅に出かけたのである。

III. マボナグリーンと「栄誉」の寵臣エーレク ——des hoves vreude——

エーレクが次に出遭う冒険は最後でかつ最大の冒険であり、これまでの試練のいわば総まとめであり、仕上げの冒険とも言えよう。これまでの冒険で内面的成長を遂げたエーレクはその自分

16) Petrus W. Tax: Studien zum Symbolischen in Hartmanns Erec. Erecs ritterliche Erhöhung. Wirkendes Wort 13, 1963. S. 279.
17) Vgl. P. Wapnewski: a. a. O., S. 57.
18) Vgl. ebd.

の騎士としての力を社会のために実行しなければならないのである。ペーター・ヴァプネフスキーがこの最後の冒険のことを「証明の冒険」(Bestätigungs-Abenteuer) と表現している[19] のも当を得た表現である。

こうしてエーレクら一行が旅に出てまず考えたのは、アルトゥース王に司候することであったが、彼らは思わぬ城へとやって来る。アルトゥース王に拝謁する前にエーレクは、ブランディガーン城と呼ばれるこの城で最も危険な一つの冒険を克服しなければならないのである。この城にやって来たことをギフレイス王は後悔して引き返すことをエーレクに勧めるが、引き下がろうとしないエーレクを見てギフレイス王はついにその城の冒険、ジョイエ・デ・ラ・クルト (Joie de la curt), ドイツ語で言えば des hoves vreude (宮廷の喜び) のことを語る。それによると、城の下にある樹園 (boumgarten) には一人の騎士が住んでいるが、彼に打ち勝とうとしてこれまで彼との決闘に挑んだ者は全て討ち倒されてしまったというのである。

この話を聞いたエーレクは大声をあげてうち笑い (vil sêre lachende, 8029) 馬を前進させるが、この笑いの態度はここでは決して嬌慢という意味ではなく、むしろ心揺がぬ (der muotveste, 8119) エーレクの象徴的表現である。エーレクの男らしい堅固な心は、髪一筋ほども揺ぎはせず、全てを戯れと思っていた (8141-6) のであり、ここでハルトマンは神を信ずるエーレクの楽天主義をきわ立たせていると言えよう。すなわち、出会う人々の迷信的な身ぶりや前兆に対してエーレクは、そのような態度には迷わされず、楽天的に (vrœlîch und wol, 8120) 神の導きを信じている勇敢な騎士として現われているのである[20]。

er gedâhte: 'die wîle und mich got	彼はこう考えている。「神が
wil in sîner huote hân,	この身を守られる限り、
sô enmac mir niht missegân:	禍の起ころう筈がない。
und enwil er mirs niht bîten,	だが、神が猶予をくださらぬなら、
sô mac ich ze disen zîten	いま死ぬとしても
alsô mære sterben,	それもまたよし。
sô der lîp doch muoz verderben.'	命は一度は尽きるもの。」
(8147-53)	

こうしてエーレクは微笑み歌いながら (mit lachendem munde, 8156) ブランディガーン城へと登って行く。城主イーフレインスから歓迎を受けたあと、八十名の婦人のところへ案内されるが、これらの婦人はその城の下の樹園に住むマボナグリーンとの決闘で倒された騎士たちの未亡人であった。婦人たちの悲しい光景に心を動かされたエーレクは、自分の妻をもこの人々の群れに加えることとならぬよう、神に祈る。この婦人たちの不幸の原因である樹園の冒険のことをエーレクは城主イーフレインスから詳しく聞き知ると、怯むどころか、エーレクの心は誠に不動のも

19) Ebd., S. 52. u. S. 53.
20) P. W. Tax: a. a. O., S. 280-1.

ので、金剛石より堅固であり (8425–7; vgl. 8435–6)、しかもこの冒険を「栄光に通ずる道」(der Sælden wec, 8521) だと理解し、それを「神の下された恵み」(genædeclîchiu dinc, 8537) だと表現しているのである。

'ich weste wol, der Sælden wec	「神の恵みを受けたる者の、栄光に通ずる道が、
gienge in der werlde eteswâ,	世のどこかにはあることを拙者は十分に知りながら、
rehte enweste ich aber wâ,	それがいずこにあるのやら、
wan daz ich in suochende reit	しかとはつかみえぬままに、先途茫々、
in grôzer ungewisheit,	求め探してさすらったが、
unz daz ich in nû vunden hân.	今こそその道を見い出した。
got hât wol ze mir getân	神は拙者に好意を寄せられ、
daz er mich hât gewîset her	拙者をこの地へ送られたのだ。
dâ ich nâch mînes herzen ger	ここで拙者は心ゆくまで、
vinde gar ein wunschspil	素晴らしい賭を致すのだ。
dâ ich lützel wider vil	ただ一度振る賽の目に、僅かな額を賭けながら、
mit einem wurfe wâgen mac. (8521–32)	大物狙いができるのだ。
...	...
diz sint genædeclîchiu dinc,	ここでこの賭を見い出すとは、
daz ich hie vinde solh spil. (8537–8)	神の下された恵みである。
...	...
ob mir got der êren gan	神が拙者に、
daz ich gesige an disem man,	件の騎士を征服する名誉をお与え下さるなら、
sô wirde ich êren rîche.' (8560–2)	拙者の名声は上がるであろう。」

このエーレクの決闘の決意に対して城主イーフレインスはもう一度よく一晩考えるようにと忠告するが、エーレクはこう言って言葉を締めくくる。

'herre, alsô got wil'	「殿よ、神の意のままに」と、
sprach *der ritter* Êrec. (8589–90)	騎士エーレクは言ったのである。

ハルトマンはこのように簡潔な表現で、真の騎士らしさと敬虔さは一つであるというエーレクの騎士としての神の信仰を強調しているのである[21]。確かにエレークの心は憂いから完全に解き放たれてはいなかったが、しかしハルトマンはそれを男の名折れではないとして次のように説く。

manlîcher sorgen	彼の心は、憂いから完全に解き放たれては
enwas sîn herze niht gar vrî,	いなかったが、それは男の名折れではない。
wan man wil daz er niht ensî	世の人びとも言うように、
gar ein vollekomen man	恐れの心を知らぬ者は、

21) Vgl. ebd., S. 281.

der im niht vürhten enkan,	完璧な男子にはあらずして、
und ist zen tôren gezalt.	むしろ愚か者の部類である。
ez enwart nie herze alsô balt,	いかに勇猛な心にも
im enzæme rehtiu vorhte wol.	理のある恐れはふさわしい。
swie gerne ein man daz vürhten sol	だが、命を危くするものを
dâ von sîn lîp en wâge stât,	いかに恐れてもかまわぬが、
habe doch solher vorhte rât	男子たる者、
diu zagelîch sî.	臆病による恐れはもってはならぬ。
der vorhte was sîn herze vrî. (8619–31)	して、臆病による恐れなど、彼の心には無縁であった。

こうしていかにエーレクが敬虔で宗教的な騎士となったかは、マボナグリーンとの闘いの準備をしているときに最もよく表現されており、これはクレチアンの作品には見られないものである[22]。

sît im der tac ze kamphe stuont,	いま闘いの日を迎え、
er tete als die wîsen tuont,	エーレクのとった行動は賢人のする通りのもの。
wan hie gehôrte vorhte zuo.	と申すのも、このような時人は不安を抱いて
ûf stuont er vil vruo.	当然である。彼は早々に起き出でて、
mit vrouwen Ênîten er kam	エーニーテと共に、
dâ er messe vernam	聖霊ミサを
in des heilegen geistes êre,	訪れて、
und vlêhete got vil sêre	わが命を守り給えと、
daz er im behielte den lîp.	ひたすら神に祈ったのである。
des selben bat ouch sîn wîp.	同じことを夫人も祈る。
ze vlîze begunde er sich bewarn,	強敵との闘いに出る騎士らしく、
alsam ein ritter der sol varn	エーレクは心をこめて、
kemphen einen vrumen man.	聖餐式にあずかった。
(8632–44)	

ミサが終わってその場を立ち去ったエーレクは、質素な朝食を取り、聖ヨーハネの恵み (sant Jôhannes segen, 8657) を飲んだあと、ようやく武装を始める。内面的な人間の宗教的な準備の方が外面的な武装の前に位置づけられているのである[23]。このエーレクの神への信頼はエーニーテへの慰めの言葉の中 (8839–73) にも表現されている。

'nu heizet ez doch ein strît	「私と騎士とを
daz under uns sol geschehen.	待っているのは闘争だ。
wem noch des siges werde gejehen,	どちらに勝ちが与えられるか、
des enhân wir dehein gewisheit.	それはなんともわからぬこと。

22) Vgl. ebd.
23) Ebd., S. 281–2.

ouch ist mir daz vür wâr geseit,	だが、今まで通り神がお優しくあられるということが、
got sî als guot als er ie was.	私には約束されている。
hei wie dicke er noch genas	おお、神の恵みにあずかる者は
dem er genædic wolde wesen!	なんとしばしば救われたか。
wil er, sô trûwe ich wol genesen.	神の思し召しがあるならば、私はきっと助かろう。
iuwer weinen ist mir swære:	そなたが泣かれると私は苦しい。
und westet ir wie mir wære,	しかし、そなたが私の気持を知りたまえば、
sô endörftet ir niht sô sêre klagen,	そのように激しく泣かれることはあるまいに。
wan ich wil iu zewâre sagen,	まことを申すが、
enhæte ich aller manheit	たとえ私に、
niender eines hâres breit,	そなたから与えられる勇気以上には、
wan der die ich von iu hân,	髪一筋の勇気もなくとも、
mir enmöhte nimmer missegân.	私はきっと成功を収めることができるだろう。
swenne mich der muot iuwer mant,	私の心がそなたを思い起こすとき、
sôst sigesælic mîn hant	私の腕は勝利をかちとる。
wan iuwer guote minne	ねんごろなそなたの愛が
die sterkent mîne sinne,	私の五体を強くして、
daz mir den vil langen tac	長い一日、私には悪しき事は何一つ、
niht widere gewesen enmac.'	起ころう筈もないのである。」

(8851–73)

神への信頼と妻へのミンネが調和的に結びついてエーレクの騎士としての自信となって現われていると言うことができよう。こうして彼はエーニーテとギフレイス王を残しておいて一騎で樹園の中へと入ってゆくのである。

このようにエーレクが宗教的・倫理的な完全な代表者として評価されているならば、その樹園に一人の愛人とともに住む敵マボナグリーンはその正反対の人物として表現されている。クレチアンの作品ではマボナグリーンの武装だけが赤いのであるが、ハルトマンの作品では武装のみならず、彼の心さえもが赤なのであると表現されている。この色は暴力の象徴である[24]。詩人ハルトマンが赤き騎士マボナグリーンのことを二度も強調して慈悲深い心を知らぬ「悪魔」(vâlant, 9197; 9270) と表現しているのも当を得た表現である[25]。この悪魔のようなマボナグリーンと今やエーレクは決闘を繰り広げるのであるが、この闘いのさまをハルトマンは次のように語っている。

diu ros wurden aber sêre	再び激しくすさまじく、
und vaste mit den sporn gemant	彼らは馬に拍車をかけ、
und wider zesamene gesant.	互いを目がけて疾駆した。
hie huop sich herzeminne	心からなる恋が始まり、

24) Vgl. ebd., S. 282.
25) Ebd., S. 283.

nâch starkem gewinne.	愛の成就を求め合い、
si minneten sunder bette:	褥もなしに愛し合った。
diu minne stuont ze wette,	競った恋の目的は、
sweder nider gelæge,	いずれであれ倒れた者が
dem wart der tôt wæge.	殺されるということである。
mit scheften si sich kusten	いとも激しい情熱をこめて、
durch schilte zuo den brusten	楯を貫き互いの胸に、
mit solher minnekrefte	槍で彼らは接吻し合い、
daz die eschînen schefte	かくてとねりこの槍の柄は
kleine unz an die hant zekluben	手のすぐそばまで粉々になり、
und daz die spiltern ûfe stuben.	その破片が飛び散った。

(9103–17)

この両者の闘いが愛の抱擁に喩えられているのも決して無造作な表現ではない。この闘いは真のミンネのかたちを求めての闘いなのである[26]。馬から大地に下り立って延々とこの決闘を繰り広げる二人の勇士に力を与えたのもそれぞれの婦人のミンネである。

ob im dehein zwîvel geschach,	彼（マボナグリーン）の心が怯んでも、
swenne er si wider *ane sach*,	夫人を再び**見さえすれば**、
ir schœne gap im niuwe kraft,	美しい妻の姿から夫はみずみずしい力を得、
sô daz er unzagehaft	揺らぐ心は消え去って、
sîne sterke wider gewan	再び強さを取り戻し、
und vaht *als ein geruoweter man.*	**休息しきった男のように**闘うのだ。
des enmohte er niht verzagen.	このようにして彼は決して怯まない。
sô wil ich iu von Êrecke sagen:	だが、エーレクに関しても、皆の衆、拙者は同様に
Êrec, ze swelhen zîten	申し上げる。エーニーテ夫人を**思うだけで**、
er *gedâhte* an vrouwen Ênîten,	彼の心と五体には
sô starcten im ir minne	ミンネが強さを与えるので、
sîn herze und ouch die sinne,	彼もみずみずしい力に満ちて、
daz er ouch mit niuwer maht	**優れた男子たるの限りを尽くし**、
nâch manlîcher tiure vaht. (9174–87)	闘うという次第である。

エーレク夫妻のミンネの方が優れている[27]ことはイタリック体（太字体）の対比からおのずと明らかである。美しい妻を思うだけで、エーレクには力が湧いてくる（9230–1）のである。こうして優れた騎士エーレクがついに敵マボナグリーンを地面に押えつけて打ち負かしたとき、彼が敗者にあわれみを見せて命を助けたのも当然であるが、このエーレクの慈悲深さは、手を貸して相手を立ち上がらせた（9388）という小さな行為——クレチアンには見られない——の中にも見

26) Vgl. H. Kuhn: a. a. O., S. 36.
27) Vgl. P. W. Tax: a. a. O., S. 283.

い出されよう[28]。二人はお互い武装を解き合うと、敵意は消え去って、草地にすわってそれぞれの身の上のことを語り合うが、このときエーレクがマボナグリーンの中に過去の自分を見い出していることは明らかである。今や知恵あるエーレクは、自分自身の過去の過ちを顧みながら警告するのである。

'wan ein dinc ist mir unerkant:
sô lange ir hinne gewesen sît,
saget, wie vertribet ir die zît,
iu enwære mê der liute bî?
swie wünneclîch et hinne sî
und swie deheinder slahte guot
sô sêre ringe den muot
sô dâ liep bî liebe lît,
als ir und iuwer wîp sît,
sô sol man wærlîchen
den wîben doch entwîchen
zetelîcher stunde.
ich hân ez ûz ir munde
heimlîchen vernomen
daz hin varn und wider komen
âne ir haz mac geschehen.
swie sis niht offenlîche enjehen,
si wellent daz man in niuwe sî
und niht zallen zîten bî.
ouch zæme disiu vrouwe baz,
diu disiu jâr hinne saz,
under anderen wîben.
wie ir mohtet belîben
ein alsô wætlîcher man,
wie mich des verwundern enkan!
wan bî den liuten ist sô guot.
nû weder habet ir disen muot
von iemannes gebote?
oder welt irs lôn haben von gote?
order sult ir immer hinne sîn?'

(9413–42)

「貴殿の生き方には、まだ納得できぬところがある。
教えたまえ、貴殿はこの樹園に入られて以後、
いかにして時を過ごされたのか。
貴殿たちの傍らには、ほかには誰もいないのに。
確かにここは素晴らしき場所、
そうしてまた貴殿と貴殿の奥方のごとく、
愛し合う同志がひたと寄り添い生きること、
これにも増して心を慰める良きことは、
人の世にまたとあるまい。
さりながら、まこと申して、
男子たる者、時に
婦人から遠ざからねばならぬのだ。
拙者は婦人ら自身の口から
秘かに聞いているのだが、
去っては戻る男の暮らしを
婦人らは怒っているのではない。
婦人らは、それをあからさまには認めぬが、
男が時には傍を離れて、新鮮な存在であり続ける
ことを彼女らは望んでいるのである。
それにまた、あのご婦人は、
幾年このかた樹園の中におられるが、
他の婦人たちのご交友こそ、よりふさわしいこと
であろうに。貴殿のように立派な男子が
何ゆえここに籠もられるのか、
拙者にはいとも不思議に思える。
世の人びとと交わるのは、まことによろしきこと
である。ここに閉じ籠もっておられるのは、
どなたかに命じられてのことであるのか。
あるいは、神の報いを求められてか。
あるいはまた、永久にそういう宿命を負わされてか。」

これらの言葉でもってエーレクがカルナントにおける自分の過ちをほのめかせているということは明らかである。すなわち、エーレクとエーニーテは、はいたか競技のあと模範的な夫婦であっ

28) Vgl. ebd.

たにもかかわらず、カルナントに帰国してからは愛を享受することにのみ閉じ籠もってしまったがために、栄誉（êre）を失ってしまった。このかつてのエーレクの状態が今のマボナグリーンのありのままの姿なのである。マボナグリーンはこれまでの決闘で全て勝利を収めてきた勇士であり、またその恋人も美しい女性であって、この二人の中には確かに「宮廷文化」の二つの最高の価値、つまりミンネと騎士道が具象化されていると言えよう[29]が、しかし、そこには「宮廷の喜び」の本質が奪い取られている。二人が住むその樹園は彼らの自己満足的な孤立生活の中で枯れ果ててしまっているのであり、「喜び」(schœner vreuden, 9595) は全て奪い取られているのである。ジョイエ・デ・ラ・クルト、つまり「宮廷の喜び」(des hoves vreude) は、孤立の中から生まれることはありえず、社会と関わり合って初めて繁栄することができるのである[30]。このことをエーレクは、人々と交わることはよいことである (bî den liuten ist sô guot, 9438) という言葉で述べている。男子たる者が時には婦人から遠ざからねばならぬことを説いたエーレクの言葉も、夫が社会へ参加することを促した警告の言葉として理解できよう。真に完全なミンネとは、それを所有し享受することに閉じ籠もることではなく、世間で認められ確証された愛のことである[31]。夫は閉じられた喜びの庭から出てゆき、社会においてその騎士としての本質を証さねばならない。ミンネと騎士道とが調和を保ち得るのは、それらが「社会」と交わるときであり、そこに初めて「宮廷の喜び」が生まれてくると言えよう。マボナグリーンにとっても初めて喜びが得られるのは、その閉じられた樹園から出てゆくことができるときなのであり、それが今やエーレクの勝利によって可能となったのである。すなわち、恋人との約束――この樹園での愛の生活に終わりのあるとすれば、それは一人の男子が彼に勝ったときのみであるという恋人との約束で、これまでその樹園から出てゆくことのできなかったマボナグリーンは、今やエーレクに敗れて初めて真の騎士となることができたのである。従って、エーレクの勝利は幾重もの意味を持っている。自分自身を救ったのみならず、エーニーテを八十名の未亡人のような境遇から免れさせたのであり、それと同時にマボナグリーンをその恋人の束縛から救い出し、その樹園に「宮廷の喜び」を取り戻させることとなったのである。そのあとマボナグリーンの要請で三度吹き鳴らした角笛の合図も、勝利のしるしのみならず、同時に世間へ喜びをもたらす知らせでもある。エーレクは世間から次のように称えられるのである。

'ritter, gêret sî dîn lîp!	「騎士よ、殿の身に栄えあれ。
mit sælden müezest immer leben!	いつまでもご多幸に暮らされよ。
got hât dich uns ze trôste gegeben	神が殿をこの国へ送られたのは、
und in daz lant gewîset.	われらを絶望の淵から救わんがため。
wis gevreuwet und geprîset,	喜びと賞賛に包まれてあれ、

29) Vgl. P. Wapnewski: a. a. O., S. 58.
30) Vgl. ebd.
31) H. Kuhn: a. a. O., S. 37.

aller ritter êre!	騎士の鑑よ。
jâ hât dich immer mêre	まことに、神は、そして殿の勇敢さは、
got und dîn ellenthaftiu hant	世界に輝く栄光の冠で、
gekrœnet über elliu lant.	永久に殿の身を飾ったのだ。
mit heile müezest werden alt!'	末長くお幸せに。」

(9669–78)

一方、マボナグリーンの敗北を嘆いていた彼の恋人も、エーニーテ夫人によって慰められているのち、エーニーテ夫人と直接の従姉妹同志である（9716–21）ことが分かり、この新たな事実を人々は賞でたき神の配慮としてほめ称える。こうしてその樹園に戻ってきた「宮廷の喜び」は、さらにエーレクの二重のあわれみによって高められる。樹園で斬り落とされていた騎士たちの首を杭の先から下ろして埋葬させたのみならず、その八十名の未亡人たちをアルトゥース王のところへ連れてゆくという行為――これはクレチアンにはない――によって「宮廷の喜び」を深めたのである[32]。エーレクはあわれみを知る人である（9785）[33]。この慈悲深い行為によってエーレクはアルトゥース王城で賞賛（9888–98）とともに大歓迎を受けるのであるが、騎士の理想アルトゥース王も慈悲深い人であることは言うまでもないことである。彼はこう言う。

'ir herren, wir suln gân schouwen	「皆の者、新しく来た婦人たちを
unser niuwekomen vrouwen,	見に行こうではないか。
und trœsten si nâch ir leide.' (9920–2)	不幸に遭った彼女らを慰めてやろうではないか。」

アルトゥース王は「婦人方を見る」という宮廷的・社会的習慣をカリタス（caritas）の次元で深めているのである[34]。アルトゥース王とエーレクは二人とも立ち上がって、手を取り合って婦人たちの部屋に行く。アルトゥース王は皆の前でエーレクを次のように賞賛する。

'Êrec, lieber neve mîn,	「エーレク、わが愛する甥よ、
dû solt von schulden immer sîn	そちは今後いつまでも
geprîset unde gêret,	賞賛と名誉に包まれて然るべし。
wan dû hâst wol gemêret	そちはわが宮廷を
unsers hoves wünne.	一層輝やかしきものとしてくれた。
swer dir niht guotes engünne,	そちに良きことのあれと願わぬ者には、
der enwerde nimmer mêre vrô.'	決して幸はないであろう。」

(9944–50)

すると人々は口を揃えて「その通り」(âmen, 9951) とエーレクを称える。'âmen' という語で最

32) Vgl. ebd., S. 30.
33) エーレクが「あわれみ」を知る人であることは、9787–96詩行というわずかな詩行の中でハルトマンによって erbarmen という単語が5度も変形されて用いられていることからも明らかである。Vgl. P. W. Tax: a. a. O., S. 285.
34) Ebd.

後が飾られているこのエーレクの賞賛は、宮廷びとの皆の前で述べられたアルトゥース王自身の口からの賛辞であり、これに勝る栄誉 (êre) はないであろう。今やエーレクは詩人によって「栄誉」の寵臣エーレク (Êrec der Êren holde, 9963) と表現されているが、これは、名誉が絶えず好意を寄せている騎士であり、そして名誉に常に忠実に奉仕するという二つの意味において理解されよう[35]。

やがて父の訃報を受け、アルトゥース王から暇をもらい、また友のギフレイス王とも別れを告げて、故国カルナントに帰国したエーレクは、人々から大歓迎を受け、さらに「奇跡を行なうエーレク」(Êrec des wunderære, 10045) だとも表現されて称えられる。詩人ハルトマンも神がエーレクを故国へ送り返した (10054) と語っている。その宴の席で真の国王として王冠を戴いたエーレクは、今や神と人間の相互作用を知っているのであり、彼に割り当てられた名誉と恩寵を神のおかげだと神に感謝の念を示すのである[36]。

er tete sam die wîsen tuont,	身に与えられたあらゆる栄誉を
die des gote genâde sagent	神に感謝し、
swaz si êren bejagent	それを神からの賜物とする賢者のように、
und ez von im wellent hân.	彼は行動したのである。
sô triuget manegen ein wân	人はしばしば妄想を持ち、
der in benamen beswîchet,	真実あざむかれてしまうのだ。
sô er sich des muotes rîchet,	何か良きことの起こるとき、
ob im iht guotes widervert,	傲慢な心に成り上がり、
daz im daz sî beschert	それがただ己の力による
niuwan von sîner vrümekeit,	と考えて、
unds gote dehein genâde seit.	神になんらの感謝もせぬ。
vil lîhte ein ende des geschiht.	そのような栄光は何とはかなく滅びることか。
alsô entete der künec niht.	だが、エーレクの振る舞いはそうではない。
sît in got hâte gêret,	彼の得た栄光は神より贈られたものゆえに、
dô wartz ouch im gekêret	彼もまた瞬時も変わらず、賞賛を
ze lobe in allen stunden.	神に向かって捧げるのである。
des wart er schœne vunden	かくてこそ、彼は、己れの心の望むがままに、
als im sîn herze gerte,	栄光に包まれていたのである。
wan im sîn êre werte	と申すのも、その栄光は、
unze an sînen tôt,	天主のみ心に守られて、
als im der himelvoget gebôt,	いかなる不幸の影もなく、
âne alle missewende. (10085–106)	彼の死ぬまで続いたのである。

ここに詩人ハルトマンの目指す理想の宮廷的騎士像の礎があると言えよう。神に敬虔な気持を捧げるエーレクは、今やエーニーテとともに、ミンネと騎士道とが完全に調和を保つ生活を送るこ

35) Vgl. ebd., S. 286.
36) Vgl. ebd., S. 287.

とができるのであり、妻への愛ゆえに懶惰の床に溺れきった昔の彼ではない（10122–3）のである。「栄誉」の寵臣エーレクには神から世の栄冠（der werlde krône, 10127）が授けられ、こうしてエーレクとエーニーテの二人は完全な永遠の栄光に到達することができたのである。

結　　び

以上のように見てくると、「エーレク」はミンネと騎士道の調和を求めての冒険の物語であると言えよう。この作品の前半で展開されるはいたか競技もある意味ではミンネと騎士的名誉を求めた冒険ではあるが、主人公エーレクはここではその調和的理想像に到達することができなかった。妻のミンネに溺れて「騎士としての本務を忘れてしまう」(sich verligen) ことによって、そのミンネと騎士的名誉がうわべだけのものに過ぎないことが暴露されたのである。矮人の鞭打ちの復讐のための決闘に付随して、いわば「偶然」によって得られたに過ぎないエーレクのミンネと騎士的名誉は、今や「積極的に」試練を受けて、溶鉱炉で純化される黄金のように、純化されなければならないのである。

エーレクがエーニーテを伴なってすぐさま出かけて行った苦難の旅がその試練による浄化の旅である。危険と苦難が繰り返し襲ってくるこの旅の途上で明示されるエーニーテの堅固な誠実さで、エーレクは内面的に成長してゆく。中でもアルトゥース王の野営における小休止のあとの冒険は、エーレクの内面的成長に重要な意味を持っている。カドク解放のために二人の巨人と闘って気絶したエーレクは、目覚めと同時にエーニーテの誠実さを確証することができ、新たな生となることができたのである。さらにそののちギフレイス王との二度目の闘いで敗北を喫することにより、自分にはまだなお unmâze（慎みのない思い上がり）があったことを悟り、大きく成長して理想の騎士像へと近づく。

この unmâze を克服して理想の騎士に到達する「栄光の道」が、すなわち最後の冒険ジョイエ・デ・ラ・クルト（宮廷の喜び）である。この冒険は決して無用の長物ではなく、無くてはならないものであり、これがこの作品の最後に位置しているのも、これは全体を反映しているからである。その赤き騎士マボナグリーンは、ミンネと騎士道を賭けた点で以前のはいたか競技のイーデールスに対応するのであり、その粗暴さにおいては盗賊・巨人に、悪しきミンネに惑わされることにおいては二人の不実な伯に、また強く勇敢なることにおいてはギフレイス王に対応すると言えるのではあるまいか。これまでの冒険の全ての人物の要素を持ち合わせたこの敵を相手にして決闘に臨むときのエーレクは、mâze（慎み）を持ち合わせた理想のキリスト教的騎士として描かれている。しかもこの決闘の場合、勝つことは敵を倒すことではなく、敵を助け出すばかりか、宮廷に喜びをもたらすことをも意味していたのである。この「宮廷の喜び」はさらにエーレクがあわれみの心をもって八十名の未亡人たちをアルトゥース王宮廷に連れてゆくという行為によって高められる。騎士の名誉（êre）は、このようなキリスト教的慈悲に基づく騎士的援助の行為によって生まれてくる。エーレクの英雄的行為は、それが他人の助けあるいは支えとな

らない限り、単なる暴力の実行以外の何ものでもない。「社会」と関わりあって初めて騎士の名誉が成り立つのであり、そのとき世間の恩寵も神の恩寵も得られるのである。この二つの恩寵を得ることこそがまさに騎士としてのエーレクの最高の目的であり理想であったと言えよう。エーレクは今や勇敢な騎士的行為で「社会」に奉仕することによって、世間からもまた神からも認められた「栄誉」の寵臣となることができたのであり、しかもその栄誉を神のおかげだと神に感謝の念を示す（10085-8）のである。ここに詩人ハルトマンの目指す理想的騎士像の礎を見い出すことができよう。この最高の騎士的理想像を求めて、この作品「エーレク」は詩人ハルトマンにとってまさにその思索の第一段階だったのであり、この最高の理想はやがて「グレゴーリウス」と「哀れなハインリヒ」の内面的考察を経て最後の作「イーヴァイン」において実現されることとなるのである。

(1983・9・10)

※本稿執筆にあたり、テクストは »Albert LEITZMANN (Hrsg.): Hartmann von Aue, Erec. 5. Auflage besorgt von Ludwig WOLFF. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1972.« を使用し、邦語で引用・説明している部分については、平尾浩三氏の訳（郁文堂刊「ハルトマン作品集」）を引用し活用させて頂きましたが、字数等の都合で表現をところどころ変えさせて頂いたところもあることを最後に付記しておきます。